

火垂るの墓を歩く会

野坂昭如氏の小説『火垂るの墓』の舞台となったゆかりの地を歩きながら、戦争の歴史について学びます。第18回目となる今年も、西宮コースと御影コースにわけて、2日間のプログラムとして実施します。

1日目－西宮コース－

〔日 時〕 2016年8月9日（火）午前9時30分～11時

〔コース〕 午前9時30分 阪急苦楽園口駅改札口集合 → ニテコ池 →
→ 阪急夙川駅 解散

〔距離〕 約2km

〔オプションツアー〕（阪急夙川駅で一旦終了し、その後はオプションツアーとします。参加希望の方はどなたでもご参加いただけます。）

阪急夙川駅 → 香榎園浜・回生病院 解散 約2km 午前12時頃終了

2日目－御影コース－

〔日 時〕 2016年8月13日（土）午前9時30分～11時30分

〔コース〕 午前9時30分 阪神石屋川駅南側公園集合 → 石屋川公園
→ 御影公会堂 → 成徳小学校 → JR六甲道駅 解散

〔距離〕 約2.5km

〔参加方法〕 申込不要。いずれの日も午前9時30分までに集合場所にお越しください。資料代として1部あたり100円をいただきます。

主 催 「火垂るの墓を歩く会」実行委員会

mail a-tsujikawa@nifty.com

<http://homepage3.nifty.com/koko-legend/hotaru/index.htm>

協 力 神戸空襲を記録する会

歴史資料ネットワーク

（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター気付）

問い合わせ先 mail a-tsujikawa@nifty.com

またはTEL090-9691-4106（ただし午後6時～8時及び実施当日）

神戸大空襲について

中田政子（神戸空襲を記録する会代表）

かつて話題となった映画、『パール・ハーバー』に取り上げられた太平洋戦争が、1941年（昭和16）12月に始まりました。そのわずか5か月後、1942年4月には神戸に最初の空襲がありました。当時、新聞やラジオでは日本軍の南洋の島々での勝利が毎日のように伝えられていましたから、アメリカ軍が日本本土に空襲してくるなんて、ほとんどの国民には考えられないことでした。神戸市民のなかには、日本軍の飛行機と思い手を振って迎えた人もいたといえます。アメリカ軍の空母機動部隊より飛び立った、ドゥリットル隊のB 25爆撃機によるこの時の空襲により、兵庫区に焼夷弾が落とされ、1人の人が亡くなりました。

1944年（昭和19）8月にマリアナ諸島がアメリカ軍に占領され、やがて大型爆撃機B 29の飛行場基地が建設されます。同年12月に入ると、神戸上空にもB 29が飛来し、爆撃作戦のため写真撮影などの偵察飛行を行なうようになりました。

1945年2月4日に、B29が69機で今の長田区・兵庫区にあった造船所や車両工場などをねらった空襲を皮切りに、終戦の8月15日までに現神戸市域には幾度となく空襲がありました。そのうち特に被害が大きかったのが、3月17日の夜間焼夷弾空襲、本庄村（現東灘区）の川西航空機を襲った5月11日の爆撃と、野坂昭如氏の小説『火垂るの墓』にもでてくる6月5日の焼夷弾空襲といわれています。

3月17日

1945年3月10日に東京、3月12日に名古屋、3月13日に大阪とB29の大編隊による大都市空襲が続き、ついに神戸にも3月17日の午前2時ごろ来襲しました。その夜、1機のB29が不気味な音をひびかせてやってきて、照明弾を投下し、町中を真昼のように明るくしてから爆撃したと言われていています。合計306機のB29が、2,300トンもの焼夷弾を投下しました。

この夜は、アラレを伴った北風が強く、焼かれた民家の火は突風にあおられて路面を走り、逃げ惑う市民の群れに追い迫りました。兵庫の運河にかかる大輪田橋附近では、橋の下が安全と思って逃げ込んだ多くの人たちの命を、水面を走る炎と旋風がうばいました。この空襲で、兵庫区、今の長田区、中央区の一部が被害をうけました。

5月11日

5月11日は、午前9時過ぎに92機のB29が来襲し、本庄村にあった川西航空機甲南製作所とその周辺に460トンの高性能爆弾を投下しました。東洋一を誇った航空機組み立て工場が壊滅し、周辺にも多くの被害があったほか、灘区役所も直撃を受け、職員が何人も亡くなりました。本庄村をはじめ、当時はまだ神戸市に合併していなかった御影町、本山村、魚崎町、住吉村などにも、大きな被害がありました。

6月5日

6月5日は、午前7時過ぎにB29が474機来襲し、3,000トンの焼夷弾を投下しました。3月の空襲で焼け残っていた今の中央区の大部分と灘区、東灘区や須磨区の一部が猛炎に包まれ、神戸市全域が焼け野原となってしまいました。

当時、春日野商店街に住んでいた体験者は、「B29の編隊がトンボのように頭上を飛び、あちらこちらで小型爆弾が炸裂する音にこれは大変だと思う間もなく、『ザーッ』という音とともに焼夷弾が雨のように降り、周囲に火災がおこりました。一歳半の長男を背中に四歳の長女の手を引き、やっと逃げた省線の高架の上から見ると、南の方は真っ赤、山の方も火の海です。高架の真中の細い溝に入って、飛んできたトタンをかぶってじっとしていました。子供達は恐怖のあまり泣き声も出しません。下を見ると、焼け死んだ人が重なり合って転がっていました」と、当時の様子をふりかえています。三宮駅から加納町にかけて、畳一枚くらいの所に、10～15発もの焼夷弾がささっていた、という人もいます。

混乱の時代で、犠牲者の正確な数字もいまだにわかりませんが、1950年に兵庫県土木計画課が発行した『復興誌』によりますと、神戸市全体の空襲による死亡者は7,423人とされています。

神戸空襲を記録する会について

1971年9月、戦後25年が過ぎて、市民が集まりあの忌まわしい体験を記録し後世に伝えようと、神戸空襲を記録する会を発足しました。翌年3月17日兵庫区の薬仙寺で、空襲犠牲者の慰霊祭をしました。今もずっと続けています。

2013年には、神戸市立大倉山公園に『神戸空襲を忘れないーいのちと平和の碑ー』をみんなの募金で建て、8月15日に除幕式を行いました。私たちと神戸市が協力して、神戸空襲で亡くなった人たちの名前を集め形にした碑です。

戦争が終わって、長い年月が経ちました。戦争・空襲を体験した人たちも少なくなっています。あんな愚かな戦争は二度としてはいけないと、つらい体験を話してくださる人たちがいます。私たちの会では、貴重な体験を聴いたり、記録したり、昔の戦争当時を思い出せるような品々を集めたりしています。

兵庫図書館の一角に戦災資料コーナーを設けています。大倉山公園や図書館に足を運んでみてください。私たちの取り組みに関心のある方は、仲間になってください。

火垂るの墓を歩く会について

火垂るの墓を歩く会は、野坂昭如さんの小説『火垂るの墓』に描かれている場所を、実際に歩いて戦争の歴史を勉強しようという集まりです。

『尼崎市史』を読む会（尼崎市立地域研究史料館主催）の世話人メンバーが中心になって、1998年（平成10）に会を作りました。1999年以降、毎年夏の時期に見学会をひらいています。

